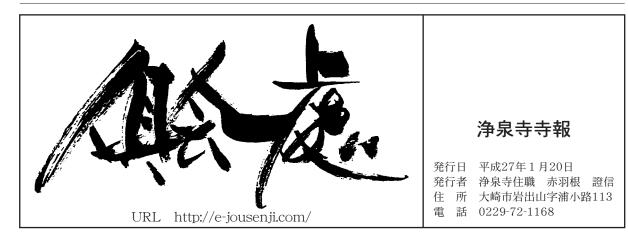
净泉寺寺報



無	事 感 謝		にご縁をいた
	争灵宇 龙頂宇	主戦「下了」民音の言	命日をよりど
		が引れ	ている報恩講
ご門徒の皆様、	皆様、新年あけまして	いと思っております。その行事の	会、新年明け
おめでとう	おめでとうございます。	ひとつに帰敬式(おかみそり)が	業等とともに
本年は寺	本年は寺報「倶会一処」をお届	あります。これまでは本山のみで	と考えており
けして20年	けして20年になります。昨年末、	行われておりましたが、いわゆる	昨年秋、庫
年賀状をし	年賀状をしたためるにあたり、昭	念仏者としての誕生式が私達一般	改造して洋式
和44年10月	和3年10月住職を拝命して55年、	の寺でも可能となりました。しか	修室として多
人生、喜寿	人生、喜寿(77歳)の節目を振り	し、私共浄泉寺での帰敬式実施は	に致しました
返りながら	返りながら、あらためて、つなが	困難ではないかと考えておりまし	り広く報恩講
りを生き生	りを生き生かされている身として	たが、ご門徒の方からの強い要望	事作業に応じ
「無事感謝」	「無事感謝」と書かせていただきま	があり、責役総代会、護寺会、そ	保し、各種行
した。何卒	した。何卒本年も宜しくお願い申	して一昨年組織された同朋の会か	トイレも全面
し上げます。	0	らのアドバイスをいただき、昨年	今回のリフ
宗祖親鸞	宗祖親鸞聖人750回ご遠忌記	5月18日初めての事業として「浄	レの改造が一
念事業であ	念事業である本山(京都東本願寺)	泉寺春の法要」を開き、そのスケ	工事の全てが
ではご影堂	ではご影堂、阿弥陀堂、山門のご	ジュールの中で帰敬式を実施させ	として完成を
修復工事が	修復工事が全国のご門徒皆様のご	ていただきました。	後はこれらの
協力により	協力により立派にその成果が果た	以前にも紹介致しましたが、帰	本来の寺の庙
されております。	(ます。	敬式は仏教の創始者である釈尊の	御同行のいの
一方教化	一方教化の面では各種研修や講	仏弟子として法名を受け念仏者と	た「聞法の道
習会などが	習会などが充実され同朋会館での	しての誕生、あらたな人生の出発	願っておりま
活動が盛ん	活動が盛んに行われております。	をされる儀式であります。また、	身ではありま
私達も上山	私達も上山してその場に参加した	春の法要は釈尊の誕生(4月8日)	し上げます。

宗祖親鸞聖人の誕生(4月1日) にだき、 ッます。 時、夏のお盆の万灯篭 よす。 画改造致しました。 しられるスペースを確 神やその他の研修の食 4の部屋40畳ほどの研 いの修正会などの諸事 こころとして行なわれ (命であります御同朋 が素晴らしい出来栄え 1事の度に問題だった た。

台所はこれまでよ 6すが宜しくお願い申 2場」にして行こうと ちのよりどころとし)施設をフルに使い、 こ喜んでおります。今 シ目的に使用できる様 「裡、台所、トイレを 定着させて参りたい 番の目的でしたが、 オームは、先ずトイ いささか老いの 秋の宗祖のご 合 掌

-1 -

净泉寺寺報

と考えることは間

違ってはい

ない

あることを明らかにしようとした

 \mathcal{O}

が親鸞の

「教行信証」

だったの

と思います。

Ŋ 願念仏、 ですが もいえますが、 晩年に至るまで加筆修正をしてお いられるのが根拠になっているの の基準として元仁元年の年紀が用 う説が一般的です。これは 即して明らかにしたもので、 重要な仕事は 格は稲田の地で出来上がっていた 代にすべて完成したのではないと 信証」の化身土巻に末法年代計算 年 宗の立教開宗とみなすのです。 でした。「教行信証」は正式には 教行信証」の制作をもって浄土真 顕浄土真実教行証文類」といい本 現在では 常陸時代の親鸞にとって、 (一二二四年) に完成したとい 教 す う 必ずしも関東に住していた時 「教行信証」 絶対他力の境地を経文に 「教行信証」 ぞ す う 「教行信証」 少なくともその骨 自体、 は元仁元 親鸞は の 「教行 この 制 最 作 も 然の られました。特に栂尾の明恵は、 仏教者から多くの批判が投げかけ そが真実の菩提心の発露であって として厳しく批判したのでした。 仏以外の教えを誹謗中傷している の必要性を認めていないこと、 仏教徒にとって一番大事な菩提心 た。その中で明恵は、 書である「摧邪輪」を著わしまし んで、それに対する厳しい批判の 法然没後「選択本願念仏集」 る意味があるといわれ いと思います。「教行信証」 土真宗発祥の地であるといってよ 責任役員 切の徳をその中に修めるもので このような非難に対し、 選択本願念仏集には、 V そのような意味で、 選択本願念仏集 「選択本願念仏集」 赤 間 法然が大乗 常 います。 栄 を補足す 正統派の 陸 念仏こ は、 国は を読 夫 念 法 浄

親鸞は です。 て、 宗から独立分離して浄土真宗とい 親鸞を後継する者が、 ら区分して、 ものですから、 においてはるかに超えて徹底した も浩瀚かつ完成された書物であっ 補遺するためというにはあまりに っても、 かったに違いありません。 たので、 後悔すべからず候ふ」というよう して地獄におちたりとも、 れまいらせて(だまされて)念仏 しようと意図されたものでした。 とによって念仏の意義を明らかに 証 なった所以ではないでしょうか。 仏集」を絶対他力の信心という点 に法然に絶対的に帰依していまし る批判に答え、それを補遺するこ 「教行信証」は「選択本願念仏集」を 宗一派を開くつもりなど毛頭な ただ、主観的には仮にそうであ 特に内容的にも「選択本願念 は そのような意味で 「たとえ法然上人にすかさ |選択本願念仏集」に対す 客観的な情況から見ても 法然から独立して自分が 独立せしめることに 自ら親鸞を法然か 法然の浄土 さらに 「教行信

れます。 ます。 のような理由からです。 証 う。 \leq は、 (一切経)を参照したといわれてい にあたって鹿島神宮所蔵の大蔵経 教開宗の起点としているのも、 意識するとしないとにかかわらず うように別立てしたのも頷けると 日に至っているとのことです。 は笠間稲荷神社の方に移され、 経蔵あとが残っているだけです。 を果たしたといってもよいでしょ 立した親鸞教団というものの成立 文字通り法然教団から思想的に独 ころです 、 「 唐 本 宮司によりますと、 応完成したということによって 親鸞が参照した一切経は、 親鸞はこの 親鸞が稲田にて ▼親鸞教 後世において、この 鹿島神社 の成立をもって浄土真宗の立 しかし、 切経を収納したといわれる 切 団 (親鸞に学ぶ」より 経」 「教行信 現在の鹿島神社に であったと思わ 「教行信証」 後の一 証 「教行信 の 恐ら 切経 執筆 Z を 今

第20号

第20号

净泉寺寺報

発		正法	库		清海	清浴	清澄海	あ 清け 発海	す。あ清 平け 発海	のす。あ清	多のす く年。あ 清 ※末平け 登海	感多のす じく年。あ 清 た、末平け 登 浄	感多のす 顧じく年。あ 清 みた、末平け 登 浄	済 感多のす を顧じく年。あ 清 最みた、末平け 登 浄	権済 感多のす のを顧じく年。あ 清問 島みた、末平け 発達	知権済 感多のす らのを顧じく年。あ 清 ず問島みた、末平け 発達	識知権済 感多のす 者らのを顧じく年。あ 清 」ず問島みた、末平け 発達	在識知権済 感多のす 」者らのを顧じく年。あ 清 の」ず問島みた、末平け 発達	こ 在 識 知 権 済 感 多 の す と」者らのを顧じく年。あ 清 がの」ず問 鼻みた、末 平 け 発 浄	りこ在識知権済 感多のすのと」者らのを顧じく年。あ 清 音がの」ず問島みた、末平け 発達	ずりこ在識知権済感多のす、 、のと」者らのを顧じく年。あ 清 つ音がの」ず問最みた、末平は 登 浄	民 ず り こ 在 識 知 権 済 感 多 の す 主 、 の と 」 者 ら の を 顧 じ く 年 。 あ 清 主 つ 音 が の 」 ず 問 最 み た 、 末 平 け 登 浄	て民ずりこ在識知権済 感多のす し主っのと」者らのを顧じく年。あ 清 まさっ音がの」ず問島みた、末平は 発達	こて民ずりこ在識知権済 感多のす とし主うのと」者らのを顧じく年。あ 清 をままっ音がの」ず問最みた、末平は 登 浄
菩提心		正法の時機と思えども	底下の凡愚となれる身は	清浄真実のこころなし	発菩提心いかがせん	(正像末和讃)		あけましておめでとうございま	平成27年が始まりました。	の年末年始は家族と過ごす時間がす。平成27年が始まりました。こまけましておめでとうこさいま	多く、あらためて家族の有難さをの年末年始は家族と過ごす時間がす。平成27年が始まりました。こまけましておめでとうこさいま	感じた次第です。 感じた次第です。	顧みますと、昨年末にかけて経く、あらためて家族の有難さをく、あらためて家族の有難さをにた次第です。	済を最優先する一方で集団的自衛の年末年始は家族と過ごす時間がの年末年始は家族と過ごす時間がの年末年始は家族と過ごす時間ががまりました。こでで、あらためて家族の有難さを	権の問題や原発再稼働の問題が、 す。平成27年が始まりました。 こ す。平成27年が始まりました。 こ です。 です。 です。 にた次第です。	知らず知らずのうちに一部の「たかけましておめでとうごさい」で、平成27年が始まりました。 「顧みますと、昨年末にかけて」「顧みますと、昨年末にかけて」「「「「」」です。」です。」です。」です。」です。	満者」によって決定され、「国民不 で、平成27年が始まりました。こ で、本成27年が始まりました。こ で、本成27年が始まりました。こ で、本成27年が始まりました。こ で、本成27年が始まりました。こ で、本成27年が始まりました。こ で、本成27年が始まりました。こ で、本ので、たちに一部の「有 によって決定され、「国民不 にかけて経 のにしたが第です。	た」の社会が一層進んでしまった でした次第です。 平成27年が始まりました。こ で、あらためて家族の有難さを の年末年始は家族と過ごす時間が です。 平成27年が始まりました。こ で、あらためて家族の有難さを した次第です。 年末年始は家族と過ごす時間が です。 年末にかけて経 です。 年末にかけて経 です。 によって決定され、 「国民不	ことが気にかかります。一人ひと あけましておめでとうこさいま あけましておめでとうこさいま	りの意見がなかなか聞き入れられ でした次第です。 一人ひと でしたって決定され、「国民不 がって決定され、「国民不 がって決定され、「国民不 したって決定され、「国民不 したって決定され、「国民不 したって決定され、「国民不 した」の社会が一層進んでしまった の社会が一層進んでしまっ によって決定され、「国民不 によって決定され、「国民不 によって決定され、「国民不	ず、ついには口をつぐんでしまう。 す。平成27年が始まりました。こ す。平成27年が始まりました。こ で、あらためて家族の有難さを 顧みますと、昨年末にかけて経 離るますと、昨年末にかけて経 離るますと、昨年末にかけて経 です。 年末年始は家族と過ごす時間が た」の社会が一層進んでしまった ことが気にかかります。一人ひと ことが気にかかります。こ	民主主義の根幹が根底から崩されでしておめでとうこさいまで、ついには口をつぐんでしまう。 で、ついには口をつぐんでしまう。 で、ついには口をつぐんでしまう。 で、ついには口をつぐんでしまった た」の社会が一層進んでしまった でま見がなかなか聞き入れられ によって決定され、「国民不 た」の社会が一層進んでしまった で、ついには口をつぐんでしまっと です。 の前題や原発再稼働の問題が、 たいの意見がなかなか聞き入れられ	てしまいそうな昨今であり、その そ、あらためて家族の有難さを の年末年始は家族と過ごす時間が がっいには口をつぐんでしまう。 でしまが気にかかります。一人ひと でっいには口をつぐんでしまう。 でしまいそうなが一層進んでしまう。 でしまいそうながします。 でしまいたい によって決定され、 「国民不知らずのうちに一部の「有 での意見がなかなか聞き入れられ の た」の れ会が 一層進んでしまっ。 そことが気にかかります。 で しまいそうな で を しまって決定され、 (国民不知らずのうちに一部の」 (国民不知らずのうちに一部の」 (国民不知らずのうちに一部の」 (国民不知らずのうちに一部の」 (国民不知らずのうちに一部の」 (国民不知らずの) (しまって決定され、 (国民不知ら) (しまって) (しまった) (しまって) (しまった) (しまって) (しまって) (しまって) (しまって) (しまって) (しまって) (しまって) (しまって) (しまって) (しまって) (しまって) (しまって) (しまって) (しまって) (しまっ) (し) (し) (し) (し) (し) (し) (し) (ことを身をもって経験することもでしまいそうな昨今であり、その年末年始は家族と過ごす時間が、 がっいには口をつぐんでしまう。 そことが気にかかります。一人ひと でしまいそうな昨今であり、その にま主義の根幹が根底から崩され によって決定され、「国民不 た」の社会が一層進んでしまった。 てしまいそうな昨今であり、その によって決定され、「国民不 た」の社会が一層進んでしまう。 たっいには口をつぐんでしまう。 でしまいそうな昨今であり、その
心	净泉寺副住職赤羽根	浅はかな身ゆえ声を出そうにも出	せない。その身を何とか奮い立た	せる機を探さなければならない、	今そういう気持ちでおります。	* 讃) 一人ひとりの声が無碍の光につ		いまのまれながら、教えとして育まれ																
		ヨそう	こか奮	なら	りま	福の		Ũ	なし	、なし	社、なし	る社、なし	いる社、なし	いる社、なし	おいる社、なし	おいる社、なし	おいる社、なし	いる社、なし	、おいころ社、なし	、おいる社、なし	おいる社、なし	、おいる社、なし	お いる社、なし	お いる社、なし
	聡	にも出	い立た	ない、	す。	シ光につ		て育まれ	ることを	もの言わ	会へ。私ることを	ような多ることを	ものたる て育まれ	も よ 会 も る て の う な 。 言 と れ な 多 私 わ を れ	願 もよ会もるての方のこうの方のこうの方のこうの方のこうの方のこうの方のこうの方のこうの方のこうの方のこうの方のこうの方のこうの方のこうの方のこうの方のこうの方のこうの方のこうの方のこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのこうのうのうのこうのうのうのこうのうのうのこうのうのうのうのうのこうのうのうのうのうのうのうのうのうのうのうのうのうのうのうのうのうのうのうのう	合願 もよ会もるて い のうへ。言とま で な 私わをれ	合願 もよ会もるて い のうへのこう 業致 だな。言とれ な多私わをれ	谷 願 ちよ会もるて うい のうへのこう 学 致 だな 。言とま し な多 私 わ を れ	谷 願 ちよ会もるて い のうへう育 学 致 だな 。言とま し な多私わをれ	 合願もよ会もるて育いのうへのこ育業 な多私わをれ 	合願 もよ会もるて い のうへのこ育 掌致 だな。言とま し な多私わをれ	谷 願 い う への こ 育 学 致 し な 多 私 わ を れ	ロ 線 の 5 c c f ゆの 2 f f む な の 1 と れ わ を れ	「限 ゆうへのこ育 い のうへのこ育 掌致 だな。言とま し な多私わをれ

報恩講参詣	また、今年も昨年に続き東日本せていただきました。
「東北別院報恩講参詣と	の被害者救援のための
はへの旅」が10月16日、	リティーバザーを開催中で、それ
5成願寺門徒25名の参加	に協力されている参詣者の姿も多
「催されました。	く見られ、別院の震災復興への思
?浄泉寺を出発。古川の	いに胸が打たれました。
と合流し東北別院に向	参詣後はその場で昼食をいただ
には別院に到着し、会場	き大船渡市に向け出発。今日の第
こったため本堂左側のい	一の目的地の長安寺には午後4時
席して開式を待ちまし	に到着し、ご住職のお話を伺うこ
〉別院の行事は例年通り	とが出来ました。40分ほどのご説
中」。今年は参詣者も増	明などをいただき長安寺を後にし
〈前とまでは言えないま	た一行は、午後6時頃には今宵の
はほぼ一杯の人で埋め尽	宿「やすらぎの宿廣洋館」に到着、
へに開催されました。	一風呂浴びてすぐ懇親会が行なわ
F10時に開始「正信偈草	れ、歌や踊りと楽しいひと時を過
「和讃」等を参加者全員	ごしお互いの懇親を深めました。
6したが、今年は少し違	2日目の17日は、運転手さんと
ものがあって戸惑って	の連携が上手くゆかず浄土ヶ浜観
がありましたが、皆さ	光船の出発時刻に間に合わず、急
>切り抜けられたようで	きょ予定を変更し先に昼食をとり
て11時からは講演があ	1時の便に乗船し浄土ヶ浜の海か
-川皓三郎師(前帯広短	らの景観を楽しませていただきま
()による講話(講題=	した。その後宮古市でのお買い物
ることの課題)を聴講さ	を楽しんで無事帰還しました。

净泉寺寺報

第20号

が

き

平戊6 丰 银恩冓起拖银与	司明の会こ思いを寄せて	と思え、そ
	同月し合い見してきた。	寄り添って
11月23日浄泉寺恒例の報恩講が	浄泉寺同	これから
厳修されました。真宗寺院にとっ	朋の会が発	いに期待致
ては一年で最も重要な仏事で、親	足して一年	南無阿弥
鸞聖人のご命日のある11月に全国	余り、毎月	
的に実施されております。	20日寺に集	お
当日は幸いにも好天に恵まれ、	まり、主に	第9回成
午前9時30分副住職の調声による	仏事のこと	月 8 ・ 9 日
みんなでおつとめ、正信偈同朋奉	を中心に、	観光ホテル
讃式を唱和、10時から組内寺院ご	活発にそし	浄泉寺同朋
住職4名もの助音により正信偈真	て和気あいあいとした雰囲気の中	加いただけ
四句目下、念仏、和讃の後、ご法	での話し合いは、時を忘れること	参加費・
話をいただきました。	もありました。	詳細は住宅
法話は、東北別院輪番・清谷真澄	5月に行われた総会では、「寺の	
師によるもので、師は、30年ほど	行事に積極的に参加して、真宗の	
前に浄泉寺で親鸞教室を開催した	教えを学んで行こう」と決議され	三一
折、10年間の長きにわたり講師と	ました。	
してお世話になった清谷和男師の	寺は仲間(御同朋・心の友)を	十 三 回
ご子息です。清谷父子二代にわた	知る場であり、仏法の声を聴く(聞	- 十 - 七 - 回
るご縁に対し、当時を知る者とし	法)場であり、自分を探す場であ	
て深いご縁を感じたものでした。	ります。今年の仏法カレンダー8	二十七回
また報恩講には、例年通り成願	月のメッセージに「今を生きずに	三十三回
寺・鬼首の方々にも団体参拝を賜	いつ生きる、ここを生きずにどこ	三十七回
り、護寺会役員・担当当番講一同	を生きる」とあります。宗祖親鸞	百 <i>3</i> 回 回
心より感謝申し上げます。	聖人は「一人で生きるときは二人	

	凹 忌 え 大	十回 忌 昭和四十一年	日昭		四和六十四年 -三回忌 平 成 五 年	平成十二	回忌 平成十五	忌 平成二	回 忌 平成二十五年	日表(平成二十		は住職まで (72) 1168	費・15000円	だければ幸いです。	同朋の会の皆さんにもご参	テルにて開催されますので	9日(日・月)1泊で鳴子	回成願寺門徒会研修会が2	お 誘 い	$\mathbb{R}^{3} \otimes \mathbb{R}^{3} $	阿弥陀仏 住 職	待致します。	からの同朋の会の活動を大	67	、その一人は親鸞なり」と
けようこの努力。	定め、種をまき育	出され実行された	である▼本堂建設	があるのだと思う	化活動が実を結び	記事も随所に見受	に関する考えや組	紹介もある▼中で	遠忌」等、その時	ご遠忌」「宗祖親鸞	ぶ」をはじめ、「蓮	が、毎号掲載の「	報告等が内容の基	研修、報恩講、各	み直してみると、	い時期である▼今	かりで事後処理が	も本堂建設の記念	大事業を終えて間	て始めたもので、	になる。ご住職が	が今回で20号(護	平成8年創刊し	あと	

現在の同朋の会 聖人750回ご 如上人500回 親鸞の教えに学 もない頃、しか 以来次々に打ち と感慨ひとしお けられ、この教 織作りを目指す も「同朋の会」 々の行事や事業 軸になっている 種の行事案内・ 、第1号から読 完結してもいな 誌を発行したば 本堂建設という 基金を用意され 寺会会報同じ) て上げる…」続 新事業。「目標を 本山・別院での た「浄泉寺寺報」

(編集委員)

-4 -